

# 万葉集2092番歌における表現「心不欲」について

竹生 政資<sup>1)</sup>・西 晃央<sup>2)</sup>

On the expression “kokoro-isayohi” in the 2092th poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU・Akihiro NISHI

## 要 旨

万葉集の中には「心いさよひ」という表現を含む歌が二つある。一つは山辺赤人の「春日野に登りて作りし歌」と題する長歌（03/0372）であり、もう一つは作者不明の「秋の雑歌」の「七夕」と題する長歌（10/2092）である。「心いさよひ」という言葉の意味は、通説では「心がためらう」などと解されている。この言葉は上代文献では万葉集のみに登場する。

ところで、七夕の歌における「心いさよひ」という表現にはまだ問題が残されている。上にあげた二つの歌のうち、山辺赤人の歌の「心いさよひ」は原文に「心射左欲比」と表記されているので問題はないが、もう一方の七夕の歌では「心不欲」という表記になっており、通説ではこれを「心いさよひ」と訓んでいるけれども、果たして「不欲」という部分が「いさよひ」と訓めるのかどうか、あるいはそう訓むことが歌の文脈に照らして適切かどうか、という点にまだ疑問が残されている。この論文ではこれらの点について検討する。最終的な結論として、七夕の歌の「心不欲」という表記は、歌の文脈との関連などから総合的に判断すれば、従来のように「心いさよひ」と訓むことは適切ではなく、「心くだけで（心砕けて）」と訓むべきであることを提案する。

## 1. はじめに

この論文の目的は、上の要旨にも述べたように、万葉集における七夕の歌の「心不欲」という原文表記に対する従来の訓読「心いさよひ」とその解釈「心がためらう」の妥当性について再検討することである。そのためにもまず、万葉集の中の「心いさよひ」という表現を含む二つの歌を提示することから始めよう。以下に、これらの歌の訓読文と大意を「新日本古典文学大系」本にしたがって掲載する。なお、訓読文の「心いさよひ」の後に丸カッコ書きで原文表記を補足した。

山部宿禰赤人の、春日野に登りて作りし歌一首 短歌を并せたり

03/0372 春日を 春日の山の 高座の 御笠の山に 朝去らず 雲居たなびき 容鳥の 間なくしば鳴く 雲居なす 心いさよひ（心射左欲比） その鳥の 片恋のみに 昼はも 日のことごと 夜はも 夜

<sup>1)</sup> 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

<sup>2)</sup> 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

のことごと 立ちて居て 思ひそ我がする 逢はぬ児ゆゑに

【大意】(春日を)春日山の、(高座の)三笠の山に、朝ごとに雲はたなびき、「かほ鳥」が絶え間なくしきりに鳴く。その雲のように心はためらい、その鳥のように片恋ばかりして、昼は一日中、夜は夜通し、立ったり座ったり私は物思いばかりしている。逢ってくれない彼女ゆゑに。

(秋の雑歌)七夕

10/2092 天地と 別れし時ゆ ひさかたの 天つしるしと 定めてし 天の川原に あらたまの 月重なりて 妹に逢ふ 時さもらふと 立ち待つに 我が衣手に 秋風の 吹き反らへば 立ちて居て たどきを知らに むら肝の 心いさよひ (心不欲) 解き衣の 思ひ乱れて いつしかと 我が待つ今夜 この川の 流れの長く ありこせぬかも

【大意】以下の2. 1節から2. 6節を参照。

さて問題は、上の二つの歌のうち後者の歌の中の「心いさよひ (心不欲)」に対する従来の訓読と解釈の妥当性である。以下の第2節ではまず、この問題が従来どのように取り扱われてきたか、過去の主な先行研究について紹介する。そして続く第3節から第5節では、従来の訓読と解釈にはいずれも基本的な問題があることを指摘し、よりふさわしい訓読と解釈を提案する。

ついでながら、句の前に「心」を伴わない「いさよひ」(またはその動詞形「いさよふ」)という表現を含む歌が万葉集の中に八首あるが、後に第3節の議論でも必要となるので、それらの歌の訓読文と大意についても「新日本古典文学大系」本にしたがって以下に掲載しておく。

柿本朝臣人麻呂の、近江国より上り来たりし時、宇治河の辺に至りて作りし歌一首

03/0264 もののふの八十字治川の網代木にいさよふ (不知代経) 波の行くへ知らずも

【大意】(もののふの)八十字治川の網代木に遮られて滞っている波の行く方が分からない。

満誓沙弥の月の歌一首

03/0393 見えなくとも誰恋ひざらめ山のはにいさよふ (射狭夜歴) 月を外に見てしか

【大意】たとえ見えなくとも誰が恋しく思わないであろうか。山の端にためらいがちに出る月を遠くからでも見たいものだ。

土形娘子の泊瀬の山に火葬せられし時に、柿本朝臣人麻呂の作りし歌一首

03/0428 こもりくの泊瀬の山の山にいさよふ (伊佐夜歴) 雲は妹にかもあらむ

【大意】(こもりくの)泊瀬の山の山間に、漂っている雲は亡き土形の娘子であろうか。

忌部首黒麻呂の友のおそく来たることを恨みし歌一首

06/1008 山のはにいさよふ (不知世経) 月の出でむかと我が待つ君が夜はふけにつつ

【大意】山の端にためらっている月がもう出るだろうかと待っている、そのように私の待っているあなたはお見えにならないので、夜は更けて行きます。

月を詠みき

07/1071 山のはにいさよふ (不知夜歴) 月を出でむかと待ちつつ居るに夜そふけにける

【大意】山の端でためらっている月を、もう出るかと待っている間に夜が更けてしまった。

月を詠みき

07/1084 山のはにいさよふ（不知夜経）月をいつとかも我が待ち居らむ夜はふけにつつ

【大意】山の端でためらっている月を、いつ出るだろうと私はあてもなく待つのか、夜は更けて行くのに。

相聞（東歌）

14/3511 青嶺ろにたなびく雲のいさよひ（伊佐欲比）に物をそ思ふ年のこのころ

【大意】青い峰にたなびく雲のように、ためらいながら物思いをしているよ。一年のなかでも特にこの頃は。

相聞（東歌）

14/3512 一嶺ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ（伊佐欲布）雲の寄そり妻はも

【大意】一つ峰のように人は言うけれども、青い峰にいざよう雲のようにためらっている。噂ばかりの妻よ。

## 2. 先行研究

まず国語辞典による説明から見ていこう。三省堂の「時代別国語大辞典上代編」によると、「いさよふ」という見出し語の説明の中で、この語には「①ためらう・躊躇する、②ただよう」の二通りの意味があることを挙げた上で、①の意味の用例として次の三つの歌を挙げている。第一例は古事記歌謡（景行記）、第二例と第三例はそれぞれ第1節に掲載した山部赤人と七夕の歌で、七夕の歌の「心いさよひ（心不欲）」について以下の考察を記載している（[1]、pp.73-74）。

（原文の）「不欲」は、「知」「比」の字をおぎなつて「不知欲比（いさよひ）」と訓む説がある。しかし、万葉の「不安（クルシ（キ））」（五三四）、「不通（ヨドム）」（一一九）、「不逝（ヨドム（メ））」（一三七九）、「不知（イサ）」（二七一〇）、「不明（オホホシ（ク））」（一九二一）、「不清（オホホシ（ク））」（九八二）、「不遠（マヂカシ）」（六四〇）、「不楽（サブシ）」（二五七）、「不恰（サブシ）」（二一八）、「不顔面（シノブ）」（二四七八）など、多くの義訓と同様にみて、右せんか左せんか心進まずの意で、このまますをイサヨフと訓みたい。

次に代表的な万葉集注釈書の説明を見ていこう。注釈は「心いさよひ」に関する部分だけを抽出し、参考のため歌の大意もあわせて掲載した。出版年の新しいものから順に掲載し、特に注目してほしい部分には下線を引き、また記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更した。

### 2. 1 新日本古典文学大系の解釈<sup>[2]</sup>

○「心いさよひ」の原文は、「心不欲」。「雲居なす心いさよひ（心射左欲比）」（三七二）を参照して「不欲」を「いさよひ」と訓読しておくが、この二字を「いさよひ」と訓むことにはなお不安が残る。「不知欲比」の誤りとする説（古義）も提出されている。

【大意】天と地とが分かれた時から、(ひさかたの)天の標識として定めた天の川の川原に、(あらたまの)月を重ねて、妻に逢う時の来るのを立って待っていると、私の衣の袖に秋風が吹いては返って来るので、立ったり座ったりして、どうしたらよいか分からず、(むら肝の)心は迷い、(解き衣の)思い乱れて、いつになったらと私が待った今夜は、この川の流れのように長くあってくれないものか。

## 2. 2 新編日本古典文学全集の解釈<sup>[3]</sup>

○心いさよひーこのイサヨフはあれこれと迷う意。原文「不欲」は心の欲するままにならぬことを示す表記か。

【大意】天と地が分かれた時から (ひさかたの) 天の目印として 定められた 天の川の川原に (あらたまの) 月を重ねて 妻に逢う 時の来るのを 立ち待っていると わたしの袖に 秋風が たびたび吹くので 立ったり座ったりして どうすればよいかわからず (むら肝の) 心は迷い (解き衣の) 思い乱れて いつになったらと わたしが待った今夜は この川の流れのように長く あってほしいものだ

## 2. 3 講談社文庫(中西進)の解釈<sup>[4]</sup>

○心いさよひー原文「不欲」はタメラウ意の意字。

【大意】天と地とがわかれた時から、遙か彼方の天のしるしとして定めて来た天の川の、その川原に、あらたまの年月を重ねては妻に逢う時期をうかがうとて立って待っていると、わが衣の袖に秋風がひるがえり吹くので、立っても坐ってもどうしていいか解らず、群肝の心もためらい、解洗い衣のように思いも乱れ、早く来いと私の待つ七月七日の夜は、天の川の流れで末長いごとくに、長くあってほしいことよ。

## 2. 4 日本古典文学大系の解釈<sup>[5]</sup>

○心いさよひー心がたゆとうて。イサヨフ、原文、不欲。不知欲比とあった文字の脱落か。欲はオモフ・ネガフ・ムサホル・セムトスなどの訓がある。不欲の意によって書いたものか。

【大意】天と地と分れた遠い昔から、天上の境界として、彦星と織姫とが川の東西にいるように定めた、その天の河の河原で、月をかさね、妹に逢う時をうかがうとて、立って待っていると、わが袖に秋風がしきりと吹くので立ったりすわったり、物に手もつかずに、心も落ち着かず、思い乱れて、何時妹に逢えるかと私の待つ今夜は、この川の流れのように長くあって欲しいものである。

## 2. 5 萬葉集註釈(澤瀉久孝)の解釈<sup>[6]</sup>

○心いさよひー原文「心不欲」とあり、旧訓コ、ロオホエスとあつたが、古義に「心不知欲比(コ、ロイサヨヒ)」の脱字だとした。そして「雲居奈須 心射左欲比(クモキナス コ、ロイサヨヒ)」(三・三七二)と同じく、「心の浮れて定らず、散乱(ミダ)れたるをいへり」と云つた。然るに「不知(イサ)」につゞく場合は「代経(ヨフ)」(三・二六四)、「世経(ヨフ)」(六・一〇〇八)、「夜歴(ヨフ)」(七・一〇七一)、「夜経(ヨフ)」(七・一〇八四)の如く下の二字も訓仮名である。(七・一〇七一)の場合、附、寛に「與」とある例を古義にあげられてゐるが、その場合も元から無まで諸本すべて「夜」とあつて、音訓混交の例は無いのである。そこで全注釈に「不欲は、心の活動しない義に依つて書いてゐるのだろう。依つてそのまゝで、イサヨヒと読む」といひ、私注にも「『不欲』は進まぬ意で、イサヨフを表わしたと見える。心のためらふ意である」とあるによるべきであらう。

【口訳】天と地と別れた時から、天上の標識として定めた天の河原に、幾月も月を重ねて、妹に逢ふ時を

窺つて、立つて待つてゐると、私の着物の袖に秋風のしきりに吹きかへるので、立つても居てもどうしやうもなく、心もおちつかず、思い乱れて、いつか早くと待つた今夜は、この天の川の長いやうに、長くあつてくれないかなア。

## 2. 6 萬葉集古義（鹿持雅澄）の解釈<sup>[7]</sup>

○不欲は、不知欲比とありしが、知比の字を落せる事しるし、さらば、イサヨヒと訓べし、(略解に、欲は欲の誤にて、不欲はサブシクならむと云れど、うけがたし、集中に、サブシキと云に、不樂不憐などとは多く書たれども、不欲と書るは見えざればなり、そのうへこゝは、サブシクと云べき處にあらず、)七の巻に、山末爾不知夜経月乎（ヤマノハニイサヨフツキラ）、とあるを、考へ合すべし、但しこれは字の訓のみなるを、欲比と字音を雜へ用ひむ事、いかゞと思ふ人もあるべけれど、同巻に、不知與歴（イサヨフ）ともあれば、少しも妨なし、さてこゝは、三の巻赤人の歌に、雲居奈須心射左欲比（クモキナスコ、ロイサヨヒ）、とあるに同じく、心の浮れて定らず、散乱（ミダ）れたるをいへり。

## 3. 従来訓読における問題点

まず「心不欲」という句の訓読の問題について検討しよう。この句の訓読については、すでに上の2. 1節において新日本古典文学大系が

「雲居なす心いさよひ（心射左欲比）」（三七二）を参照して「不欲」を「いさよひ」と訓読しておくが、この二字を「いさよひ」と訓むことにはなお不安が残る

と指摘しているように、原文の「不欲」を「いさよひ」と訓むべき確かな根拠はない。ただ第1節に掲載した山辺赤人の歌の中に似たような心情（逢えない兎に対する片思い）と思われる表現「心いさよひ（心射左欲比）」があることが根拠の一つとなっている。

また「不欲」を「いさよひ」と訓むもう一つの根拠として、原文の「不欲」はもとは「不知欲比」であったけれども何らかの原因で「知」と「比」の部分が脱落したのではないか、という鹿持雅澄の説（2. 6節）がある。しかしこの説は、もとあった四文字「不知欲比」の中からはなぜ2文字目と4文字目だけが「たまたま」脱落して「不欲」が残ったのか、この点について十分な説明ができない。またこの説の別の問題点として、2. 5節で澤瀉久孝が指摘しているように、原文で「不知〇〇」の形をした万葉集の用例は、「不知」の部分も「〇〇」の部分も共にすべて「訓」仮名であり、鹿持雅澄が主張するように「不知」（イサ）は訓仮名で「〇〇」に相当する「欲比」（ヨヒ）は音仮名という訓音混交の例は存在しないことが明らかにされている。さらに、原則論の立場から言っても、鹿持雅澄の説のように原文を「改訂」して都合のいい解釈を行うことは明確な根拠が示されない限り受け入れられないであろう。

## 4. 従来解釈における問題点

次に「心不欲」の意味について検討しよう。この句の意味については、すでに第2節の各注釈書の大意の中に示されているように、「心不欲」を「心いさよひ」と訓んだ上で、これまで以下のような四通りの解釈が行われてきた。

- |            |                |
|------------|----------------|
| ①「心は迷い」    | 2. 1節と2. 2節の解釈 |
| ②「心もためらい」  | 2. 3節の解釈       |
| ③「心も落ち着かず」 | 2. 4節と2. 5節の解釈 |

## ④「心も浮かれて定まらず、乱れて」 2. 6節の解釈

まず①と②の「心は迷い」あるいは「心もためらい」という解釈は、「心いさよひ」の「いさよひ」という言葉の意味を忠実に取り入れた解釈である。しかしこの解釈だと歌の文脈にそぐわない。この七夕の歌は、いよいよ七夕の日が近づいてきた時の彦星の気持ちを、彦星になり代わって作者が歌ったものである。一年に一度しか逢えず、これからやっとその逢える日が近づいてくるというのに、「心は迷い」とか「心もためらい」という気持ちになるものだろうか。はやく逢いたいという気持ちでいっぱいなのはである。実際、いま問題となっている「(むら肝の) 心不欲」という句の前には「立ちて居て たどきを知らに」という表現があり、後には「解き衣の 思ひ乱れて」という表現が続き、「七夕の日が来るのを待ちきれずに、立っても居てもおれず、思い乱れている」という切実な気持ちが歌いこまれている。こうした気持ちの中に、「心は迷い」とか「心もためらい」という解釈を割り込ませる従来の解釈は、文脈にあった解釈とは言えないであろう。

ついでにここで、七夕の歌の「心不欲」を「心いさよひ」と訓むにあたって唯一の手がかりとされた山部赤人の歌の「心いさよひ」の背景についても検討しておこう。山部赤人の歌も七夕の歌も男から女への思いを歌ったものであり、この点においてはいずれも同じであるけれども、詳しく見るとこの二つの歌が詠まれている背景は異なっている。山部赤人の歌の場合、男が思いを寄せている相手の女は「逢ってくれない女」（いくら思いをつのらせてもどうせ逢えないとはじめから結果がわかっている女）であるのに対して、七夕の歌は一年に一度しか逢えないけれど相手の女（織姫）も彦星に切に逢いたいと思っており、しかも逢える七夕の日が近づいているという状況である。このように歌の背景が基本的に異なっているのであるから、従来の解釈のように、七夕の歌の「心不欲」を山部赤人の歌の「心いさよひ（心射左欲比）」に単純に重ねて「心いさよひ」と訓み、同じ気持ちを表わしていると解釈するのは、はじめから適切なやり方とは言えないであろう。

一方、③と④の「心も落ち着かず」あるいは「心も浮かれて定まらず、乱れて」という解釈は、文脈にはほぼ合っているように思われるが、「心いさよひ」という言葉自体の意味から少し外れた解釈になっている。というのは、第2節の最後に列挙した「いさよひ」（またはその動詞形「いさよふ」）を含む八首の歌の解釈からも明らかなように、「いさよふ」という言葉のもつ原義は「物や心が何かに引きとめられて動こうにも動けない」状態を表わしていると考えられるからである。③の「心が落ち着かない」という解釈は、心が「絶えず動きまわる」ことを意味しており、「いさよふ」という言葉の原義から少し外れている。④の「心も浮かれて定まらず、乱れて」についても同様である。

以上のことから、七夕の歌の「心不欲」を「心いさよひ」と訓む限り、その訓みに含まれる「いさよひ」という言葉の意味に忠実に「心はためらい」と解釈すれば歌の文脈にそぐわなくなり、また歌の文脈に何とか合わせて解釈をしようとすれば「いさよひ」という言葉の意味から外れざるをえなくなる。このことは、「心不欲」を「心いさよひ」と訓むこと自体もともと無理があったということにほかならない。

## 5. 新しい訓読と解釈の提案

従来の訓読と解釈における以上の問題点を解決するためには、「心不欲」という表記の意味をもう一度検討し直して見る必要がある。万葉集には、「不安」という原文を「クルシ(キ)」と訓ませたり、「不通」を「ヨドム」と訓ませたりする多くの「義訓」がある。問題は、「心不欲」という原文表記に対してどういう義訓が適切か、ということである。

「心不欲」は、その表記の意味を「漢文的」に忠実に解釈すると、「(自分の) 心が、欲しない(状態に

あること)」を意味するものと思われる。では「欲しない心の状態」とはどのような状態か。歌の文脈にしたがって解釈すれば、心が「病気の状態」、つまり、心が通常の安定した状態ではなく「自分の理性の力ではコントロールできない状態」になっていると考えられる。

このことを念頭におき、歌の文脈の流れを整理して、「心不欲」という表記の前後の部分だけを抽出してみると、次のような「①→②→③→④」の流れとなる。

- ①「我が衣手に 秋風の 吹き反らへば」(秋風が吹きいよいよ七夕の日が近づいてきたので)
- ②「立ちて居て たどきを知らに」(立っても居てもどうしていいかわからずに)
- ③「むら肝の心不欲」(自分の心が理性ではコントロールできない状態になって)
- ④「解き衣の 思ひ乱れて」(解きほどいた衣のように、思い乱れて)

この流れを見てわかることは、もし「心不欲」という部分を③に示したように「自分の心が理性ではコントロールできない状態になって」と解釈することにすれば、「①→②→③→④」の文脈の流れの中にびつたりおさまるということである。したがってあとは、「心不欲」に対する訓読文、つまり「自分の心が理性ではコントロールできない状態になって」を意味する言葉を探す問題に帰着する。

ところで、万葉集の長歌には、漢詩の対句に似た繰り返し表現がよく用いられる。例えば、万葉集の有名な29番歌(柿本人麻呂の近江荒都歌)「... 天皇の 神の命の 大宮は ここと聞けども 大殿は ここと言へども 春草の 繁く生ひたる...」のような例である。このような例は挙げればきりが無い。したがって、いまの七夕の歌の場合も、③と④の関係がこのような「対句的繰り返し」になっている可能性は高い。というのは、意味的には③の「自分の心が理性ではコントロールできない状態になって」と④の「思い乱れて」はほぼ似たような意味であり、似た意味を別の表現によって繰り返し意味を強調している可能性が考えられるからである。もしそうだとすれば、これからなすべきことは、万葉集のすべての歌の中から、「自分の心が理性ではコントロールできない状態になって」という意味をもち、かつ「心○○○」という形をもち、さらに「思い乱れて」と対句的關係にある四文字の言葉「○○○○」を探す問題に帰着する。「心不欲」は「むら肝の」という五文字句に続く七文字句であるから、この七文字から「心」に相当する三文字を引くと、あと「不欲」に相当する四文字だけが「未知」の文字として残るからである。

それでは、「思い乱れて」や「自分の心が理性ではコントロールできない状態になって」に近い意味をもつ「心○○○○」という言葉が果して万葉集の中に存在するだろうか。実は、もう一つ問題を解く手がかりがある。それは、「心不欲」の前に「むら肝の」という枕詞が置かれていることに注目することである。この枕詞は「心」にかかるが、これとほとんど同じはたらきをする枕詞として「肝向かふ」がある。「むら肝の」または「肝向かふ」という枕詞を含む歌は万葉集の中に六例ある。以上のことを総合すると、これからなすべきことは、万葉集のすべての歌の中から以下の三つの条件を含む言葉を探し出すことである。

- ①「心○○○○」という形の句であること
- ②「思い乱れて」や「自分の心が理性ではコントロールできない状態になって」という意味に近いこと
- ③(必須条件ではないが)できれば句の前に「むら肝の」または「肝向かふ」という枕詞が置かれていること

以上の観点から万葉集のすべての歌を調べてみた。その結果、可能性のある言葉は、「心をいたみ」、「心くだけで」、「心みだれて」の三つに絞られることがわかった。以下に、これらの言葉を含む六例の歌の訓読文を「新日本古典文学大系」本にしたがって掲載する。

讃岐国の安益郡に幸したまひし時に、軍王の、山を見て作りし歌

01/0005 霞立つ 長き春日の 暮れにける たづきも知らず むらきもの 心を痛み(心乎痛見) ぬえこ鳥 うらなけ居れば 玉だすき かけのよろしく 遠つ神 わが大君の 行幸の 山越す風の ひとり居る わが衣手に 朝夕に かへらひぬれば ますらをと 思へる我れも 草枕 旅にしあれば 思ひ遣る たづきを知らに 網の浦の 海人娘子らが 焼く塩の 思ひそ焼くる わが下心

柿本朝臣人麻呂の石見国より妻を別れて上り来たりし時の歌二首 短歌を併せたり

02/0135 つのさはふ 石見の海の 言さへく 辛の崎なる 海石にそ 深海松生ふる 荒磯にそ 玉藻は生ふる 玉藻なす なびき寝し児を 深海松の 深めて思へど さ寝し夜は いくだもあらず 延ふつたの 別れし来れば 肝向ふ 心を痛み(心乎痛) 思ひつつ かへりみすれど 大船の 渡の山の 黄葉の 散りのまがひに 妹が袖 さやにも見えず 妻ごもる 屋上の 一に云ふ、「室上山」 山の 雲間より 渡らふ月の 惜しけども 隠らひ来れば 天伝ふ 入日さしぬれ ますらをと 思へる我も しまたへの 衣の袖は 通りに濡れぬ

大伴宿祢家持の、娘子に贈りし歌七首

04/0720 むらきもの心<sup>くだ</sup>摧けて(情揣面) かくばかり我が恋ふらくを知らずかあるらむ

娘子を思ひて作りし歌一首 短歌を併せたり

09/1792 白玉の 人のその名を なかなかに 言を下延へ 逢はぬ日の まねく過ぐれば 恋ふる日の 重なり行けば 思ひやる たどきを知らに 肝向ふ 心碎けて(心摧面) 玉だすき かけぬ時なく 口止まず 我が恋ふる児を 玉釧 手に取り持ちて まそ鏡 直目に見ねば したひ山 下行く水の上に出でず 我が思ふ心 安きそらかも

弟の死去せしを哀しみて作りし歌一首 短歌を併せたり

09/1805 別れても またも逢ふべく 思ほえば 心乱れて(心乱) 我れ恋ひめやも 一に云ふ、「心尽して」

夫君を恋ひし歌一首 短歌を併せたり

16/3811 さにつらふ 君がみ言と 玉梓の 使も来ねば 思ひ病む 我が身ひとつそ ちはやぶる 神にもな負ほせ 占部すゑ 亀もな焼きそ 恋ひしくに 痛き我が身そ いちしろく 身にしみ通り むら肝の 心碎けて(心碎面) 死なむ命 にはかになりぬ いまさらに 君か我を呼ぶ たらちねの 母の命か 百足らず 八十の衢に 夕占にも 占にもそ問ふ 死ぬべき我がゆゑ

以上の六例の歌の中には、万葉集の中の「むら肝の」または「肝向かふ」という枕詞を含む六例のうち七つの歌を除いた五例がすべて含まれている。すでに述べたように、可能性のある「心〇〇〇〇」の候補としては、これら六例の歌に含まれる「心をいたみ」、「心くだけで」、「心みだれて」の三つのみである。



以下、この三つの言葉の中から最適なものを決定しよう。

まず六例のうち、「心はいたみ」を含む二例（「01/0005」と「02/0135」）はともに①と③の条件を満たしており、また②の条件も不十分ながら満たしているが、歌の詠まれた背景が七夕の歌の場合とは異なっている。実際、上に示した歌の内容からも明らかなように、「01/0005」の「心をいたみ」は旅先における望郷の気持ちを詠んだものであり、七夕の歌とは明らかに背景が異なっている。また、「02/0135」の「心をいたみ」は、柿本人麻呂が石見国から妻に別れて上京してくる時に「離別のつらさ」を詠んだ歌であり、これもまた七夕の歌とは背景が異なっている。

次に六例のうち、「心みだれて」を含む一例「09/1805」は、①と②の条件は満たすが③の条件は満たしていない。またこの歌は、死んだ弟に対する思いを詠んだものであり、七夕の歌の場合とは背景が異なっている。

残りの三例（「04/0720」、「09/1792」、「16/3811」）は、①と②と③の三つの条件をすべて満たしており、しかもすべて「心くだけで」という同じ表現が用いられている。特に、「04/0720」と「09/1792」は男が娘に寄せる切実な思いを詠んだものであり、歌の背景が七夕の歌と酷似している。一方、「16/3811」の歌には妻から夫君に対する「死ぬほどの」切実な思いが詠われており、七夕の歌と対比すると作者の立場が男女入れ替わっているけれども、「心くだけで」という表現に込められた気持ちはまったく同じだと思われる。

以上の考察から、七夕の歌の「心不欲」という原文表記に対するもっとも適切な訓読は「心くだけで（心砕けて）」と結論してよいであろう。実は、この訓みが最適だとするもう一つ別の理由がある。それは「心不欲」の前に置かれている「むら肝の」という枕詞との関係である。この枕詞は万葉集に四例登場するが（七夕の歌のほか、上にあげた「01/0005」、「04/0720」、「16/3811」）、「むら肝」に対する原文表記はすべて「村肝」となっている。「村肝」の「村」という表記が、「多くのものが群がっている」という意味の「群（むら）」を意図したものであることは、舒明天皇が天の香具山に登って歌った次の国見歌の「村山」の例からも明らかであろう。

01/0002 大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば...

（原文）山常庭 村山有等 取与呂布 天乃香具山 騰立 国見乎為者...

文献[3]の頭注によると、「ムラ肝は、肝臓のみならず、肺臓・胆嚢などさまざまな臓器の総称で、古代人は精神作用の営まれる部位について一定した理解がなく、これらの臓器のあれこれの活動と考えた」と説明されている。したがって、以上のことを念頭においた上で、もし七夕の歌の「むら肝の 心不欲」という表現を「むら肝の 心砕けて」と訓むならば、「むら肝の」という枕詞は単に「心」にかかる形骸化した「付け足し」の表現などではなく、「体の中にある多くの臓器がバラバラに砕けてしまいそうなほど」という彦星の切実な思いを表現していることになる。ちなみに、万葉集には「心砕けて」という表現が三例（いまの七夕の歌は別として）あるが、そのうち二例には「むら肝の」という枕詞が、残り一例には「肝向かふ」という枕詞が冠せられている。したがって、「心不欲」に冠せられている「むら肝の」という枕詞に注目してその使われ方から判断するだけでも、「心不欲」の訓みが「心砕けて」である可能性はきわめて高いと言えるであろう。

最後に、「心不欲」に対する訓読の候補としては、上に挙げたほかにも、②の条件を少し拡大して考えれば、③は満たさないものの①と②の条件を満たす言葉がいくつか存在する。例えば、「心悲しく」、「心寂しく」、「心ぞ痛き」、「心し痛し」などの言葉である。しかしこれらの言葉を含む歌は、その歌が詠まれ

た背景が七夕の歌の場合と異なっており、「心不欲」に対する訓読語としての可能性は「心をいたみ」や「心みだれて」よりもさらに低いと見てよいであろう。

## 6. おわりに

七夕の歌（10/2092）の原文に含まれる「心不欲」という原文表記は、山部赤人の歌（03/0372）に含まれる「心いさよひ（心射左欲比）」という句に対する類推から、これまで「心いさよひ」と訓読され「心はためらい」などと解釈されてきた。この論文では、この句に対する従来の訓読と解釈について再検討を行い、「心不欲」という表記は従来のように「心いさよひ」と訓むことは適切ではなく、「心くだけで（心碎けて）」と訓むべきであることを提案した。

この提案の主な根拠として、万葉集の中に七夕の歌の「むら肝の 心不欲」という部分に直接対応する「むら肝の 心碎けて」というまったく同じ構造をした歌があり、しかも句の意味が完全に対応するだけでなく、歌の詠まれた背景までもが酷似していることを示した。この論文で提案した結果が果して妥当なものであるかどうか、大方の批判を仰ぎたい。

## 7. 参考文献

- [1] 「時代別 国語大辞典 上代編」、三省堂、2005年。
- [2] 「万葉集 二」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp.478、2000年。
- [3] 「万葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、pp.98-99、1995年。
- [4] 「万葉集 原文付全訳注（二）」、中西進、講談社文庫、pp.356-357、1980年。
- [5] 「万葉集 三」、日本古典文学大系、岩波書店、pp.104-105、1960年。
- [6] 「万葉集注釋 卷第廿」、澤瀉久孝、中央公論社、pp.36-37、pp.127-129、昭和43年。
- [7] 「万葉集古義」、鹿持雅澄、国書刊行会、pp.369-370、明治31年。